

北京大学 教室探訪

工藤俊一

中国きつての名門北京大学は、

北京西北郊外の海淀区にある。清朝の離宮頤和園や世界的名園と謳われた円明園遺蹟に接し、二三〇万平方メートルに及ぶ広大なキャンパスは、豊かな緑に囲まれ、桃源郷ともみまがうたはずまいをみせている。この恵まれた環境に、中国の次代を担う俊秀が日夜、勉学にいそしんでいる。

一九九五年から二年間、私は北京大学の教壇に立ち、中国の超エリートたちと朝夕接した。そして、日本ではみられない、瞳を輝かせながら明日を目指して学ぶ、中国の若者たちの情熱を痛いほど肌で感じ、羨ましさを禁じ得なかつた。その質朴とさえいえる学園生活の一端を、教室のあれこれから

探ろう。

日本の大学と違って、北京大学は教室、図書館をはじめ一万五千人に及ぶ全寮制の学生(通信教育、夜学生を含めると全校生二万三千人)を収容する学生寮、旺盛な食欲をみたす学生食堂から教職員住宅、附属の小、中、高校、さらに幼稚園に至るまでのもろもろを抱えて運営されている。だから資金不足から、各分野にひずみが生まれることになる。教室も例外ではない。

北京大学の教室難は並大抵のものではない。新校舎もつぎつぎと建てられているが、まだ問題を解決するにはほど遠い。昔ながらの教室棟も含めてやりくりしているのが現状だ。

中国の大学の新学期は九月から始まる。一九九五年、この年の新学期は九月四日から。北京大学では、学期ごとに使う教室が代わる。だから最低年に二回。私は高学年の三年、四年生の二つのクラスをもっていたので年四回ということになる。こんどはどういう教室になるのか、学期の代わりめが楽しみだった。

私が北京大学の教室に初めて足を踏み入れたのは、この年の九月七日、三年生の作文の初講義のときで、第四教室棟の一階の教室だった。興味津々という表情の学生たちに迎えられて、教室に一步入ったとたん、思わず「おやっ」と思った。学生が多いのか教室が狭いのか、とにかく身動きできさうもない。

教壇からみると、左右に二列、前後に三列、木製の机が並んでいる。一つの机は三人ずつ。椅子は一〇センチ幅ほどの細長い木製の

ベンチで、いちばん後ろの四人目は、はみだして靴磨きの腰かけのような小さい台にちよこんと座っている。総員一九人。

いちばん前の机は教壇にくっついていて、おまけに教壇が高めなので、その上に立つと学生が真下にいるような錯覚にとらわれる。学生は下から私をみあげている。

中国の最高学府、北京大学のこの寸づまりの教室に私は目をみはつた。いかにも歴史を感じさせる古びた、質実剛健を地でいったような古い教室だった。この教室で、私の北京大学の講義がスタートした。

このときは、教室があまりに簡素で窮屈なのに驚いたのだが、これはまだまだ序の口。とてもそんな甘いものでないことを、このあと、いやというほど知らされることになる。

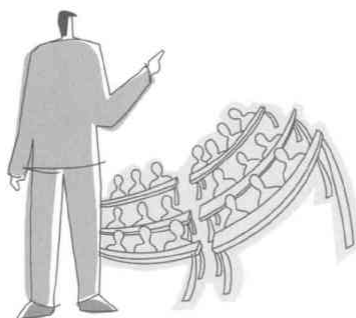
二年めの九六年に入ってまたまた変化に見舞われる。なにしろ、

北京大学には教室が多い。広いキャンパスのなかに新旧とりまぜて点在している。学期のすべりだしにまごつかないためには、前もって確認しておく必要がある。九月早々下見にでかける。

それでわかったのだが、こんどの三年生の作文の教室がなんとユニークだった。教室はキャンパスの中央、図書館の東側にあたる「文史楼」の二階の一室。文史楼は名前の通り王朝風の屋根瓦をもつ教室棟だ。

最初のぞいて唖然とした。なんと形容したらいいのだろうか、とにかく初めて見る光景だ。一年めの経験から、北京大学の教室に狭いのが多いのには慣れたつもりだった。しかしこの教室はまた、意表を突くものだった。

なにしろ極端に横に細長い。机も椅子も成形のしつかりした作りつけなのだが、机は廊下側から外に面した窓際まで、横に長く一直



線に伸びている。それに折りたたみの椅子が九つついている。つまり九人分だ。これが二列並ぶ。さらに教壇の右横に三人分の机がある。全部で二人収容できる。

ところで、この二列の机がいずれも教壇のすぐ前、教師と学生の顔がぶつかるような近さにある。教壇からみると、幅広で、奥行きが極端につまった教室だ。だから教壇に立って、一列目の左の端から右の端へと学生の顔を見回しながら話をすると、私の顔はいつも一八〇度の回転をくりかえすはめになる。学生と親しみやすくなることうけあいだ。

奥行きがないので、ちよつと声をはりあげたら壁を突き抜けてしまいそう。声が大きくない私には、うつつけかもしれない。とにかく下見をしてよかった。ぶつつけ本番だったら、さぞとまどつたことだろう。

九月五日、この教室で、九六年

度の新学期が始まる。三年生の作文の授業だ。

キャンパス内にある教師宿舎から教室へ向かう途中、美しい北京大学のシンボル未名湖の湖畔の柳に、大きな瑞鳥カササギが飛び交っていた。カササギの姿を見るといつも心が弾む。まもなく教室を下見した文史楼に着く。文史楼は私たちの宿舎からはかなり近い。

廊下で、五、六人の三年生にとり囲まれる。女子学生のひとり、「先生、きょう授業があるのですか」とたずねる。クラスメートに、「こんどの私たちの授業よ」と言

われ、「わあつ」と喚声をあげる。時間割を勘違いしていたらしい。横長の教室には学生がいっぱい

だ。本科生一八人に聴講生三人。うち一人は法学部の大学院生で、日本留学に備えたいのだという。本科生はみな顔見知りだ。しかし作文の授業は初めてとあつて、

緊張しているのがよくわかる。リラックスさせる方法のひとつとして、昨年の例をあげる。それは日本語の勉強が苦手だった学生が、真剣に作文に取り組んでいるうちに日本語に興味湧いてきて、みるみる日本語が上達した一年先輩の話だ。それから核心に入っていく。

このクラスは日語教研室（教員室）でも評判の活発な学生たちなので、これからどんな個性を見せてくれるか大いに楽しみだ。一八〇度の回転をくり返しながら、私の講義も熱が入ってきた。

一〇月初旬、教研室の主任から電話が入る。

「先生、作文のいまの教室はたいへん狭いようですね。ですから、広い教室を手配しました。こんどからそちらでお願いします」

住めば都。今の横長の教室も狭いなりにユニークで、やつとなじみできたところ。これもなかなか味があると、少しも苦にならなく

なっていた。

しかし、せっかくの好意ある手配なので、このユニークな教室は五回使ったところで移ることになった。

新しい教室は、一〇月上旬の三年生の授業から使用した。教室は、図書館の南隣りにある王朝風屋根瓦の、堂々たる建物「哲学楼」の三階にある。

来てみて驚いた。教室ぐらいで驚いてはいけないのだが、こんどは格段に広い。前の教室の三倍はある。天井も高く圧倒されそうだし、しかし、その古めかしいこと。哲学楼という名のごとく、なにか思索にふけらなくてはいけないようだ。

学生たちもとまどっていたが、教室が広いのでゆつたりと席をとる。教壇に立っていたのは、大きな声をはりあげないと後ろの方までとどかない。こんどは顔の一八〇度回転ではなく、教室のなか

をしきりに往復することになった。

教壇からみて、真ん中を通路として、木製の机が左右に分かれてゐる。左側に窓があるが、北側なので一日中、太陽はあたらぬ。一〇月のうちはよかつたが、そのうち強い風が吹いたと思つたら気温がどんどん下がります。一〇度を割って、最低気温六度となると、やはり寒さがこたえる。

狭い教室の場合は、若さにあふれた学生がいっぱいなので、その熱気で寒さもいくらかカバーできた。こんどは広すぎる。窓側にスチームはあるがあてにならない。さわってみてもほのかに感じられる程度だ。

寒がりやの私は外ではすでにダウンのコートで歩いてきたが、教室ではコートを脱いで教壇に立っていた。しかし、一月に入ったある日、講義をしているうちにぞくぞくときた。寒くて耐えられそ

うもない。今体調をくずしたらたいへんだ。講義に穴を開けるわけにはいかない。行儀は悪いがやむを得ず、ちよつと断つてダウンを着て講義をつづけた。

だがこれは私だけではない。若さにあふれる学生たちも、このころは前後して私同様、ダウンジャケットや防寒コートを着て、雪だるまのように着ぶくれたまま教室に座つて講義を聞きだした。

年が明けて一月になると、気温は零下を告げた。ある日教室に入ると、なんと教室の右側半分が寒々と空いている。おやつと思つたがすぐナゾが解けた。あまりに寒いので、いままで右と左に分かれて座っていた学生たちが、みんなかすかではあるがスチームがある左側の席に移り、肩を寄せあい固まりあつて座っていたのだ。それで寒さに耐えている。おそるべき民族ではないか。ちなみに暖房が心細いのは寮も同じだという。

作文の授業はこの広々とした、寒い教室で一月末までがんばって前期末試験をすませ、冬休みに入った。結局、この教室には一四回足を運んだ。

後期はまた教室が変更になった。こんどは第三教室棟の三階で、文史楼のときに似た横長二列の机が並んだ教室だが、いくぶん広めだ。教壇と前列の机との距離がいくらあるので、文史楼のときのように、教壇から学生に向かつて、顔を一八〇度回転させる必要はなかった。

それでも窮屈なことにかわりない。机が固定されているうえ、横に長いので出入りに不便だ。休憩時間や授業がすんだとき、なかの席に座った学生は、机をまたいで出てきたりする。北京大学の教室ではいろいろな応用動作が必要になる。こうして学生たちは、不自由に耐えながら勉強に励んでいる。こうして見てくると、北京大学

の学生生活を支えているものもろ、教室のほか、食堂や学生寮さらに暖房にいたるまで、いずれも決して満足なものとはいえない。むしろそれぞれが、かなりの問題を抱えている。

しかし、教育に必要なのは、机や椅子、食堂、寮また暖房などの完備ではないようだ。その証拠には、北京大学のこれらの古びた教室、寮から、年々多くの人材が輩出しているのだから。

私がたびたび北京大学の教育施設を見て驚いたのは、「最髙学府」という先入観にとらわれすぎたからだ。大切なのは、学生の質と勉強にかける熱意。そしてこれに応える教師の情熱とレベルの高さ。これではないか。二年間、中国のエリート学生たちに接して得た私の教訓である。

ところで北京大学では、教室は授業だけでなく、学生の自習室としても貴重な存在だ。なにしろ学

生寮はとても狭い。部屋には二段ベッドのほかは、小さな共用の机が一つあるだけだ。部屋の寮生みんなが机に向かい、本やノートを広げて勉強することは不可能だ。

そこで授業以外、学生の一日は自習室探しから始まる。その第一が図書館の閲覧室。しかし、閲覧室は席が限られ、いつも満席。勢い、空いている教室が自習室になる。だから、空いている教室の席の確保が重要になる。いかにして良い自習室を確保できるか、これが一日の勉強の能率を左右するポイントだ。夜、明々と照明がともった教室で、私語ひとつ発せず、黙々と勉強に励んでいる学生の姿は胸をうつものがある。

北京大学の学生は、朝から夜まで、実によく勉強する。その学生たちが、いかに自習室の席の確保に苦労しているか、実情をみよう。私の授業は、三年も四年もそれぞれ、同じ教室を使っていた。そ

の教室で、授業があるか、ないかで自習室になったり、ならなかったりする。

三年生は、午前中、朝から同じ教室の授業なので、他の学部の子生の自習室にはならない。しかし、四年生の場合が違う。午前の前半か後半のどちらかの時間は授業がない。そこで恰好の自習室になる。

ある日、授業時間前、いつもより少し早めに四年生の教室に着いた。教室のドアを開けたら、もう学生が何人か座っている。いつもは私の方が早いので、

「おや、感心。きょうは学生の方が早い」と喜んだ。

ところが見回してみても、知った顔がない。

「おやつ、さては教室を間違えたかな」と首をかしげていたら、日語科の学生が顔を見せたのでほっとする。早速、彼が座っていた学生に、

「有課」(授業があるんだ)

と説明。一、二時限、この教室で授業がなかったため、朝早くから空いていた教室に席を確保して、熱心に自習をしていた学生たちは、ししぶ腰をあげて出ていった。

逆の場合もある。試験のときなどがそうだ。

期末試験は、ふつう午前八時から二時間行われる。試験のときは、学生が離れて座れるようにするため、日語科の場合も大きな教室を使った。

四年生の前期末試験のときだった。ふだんの数倍ある大きな教室になった。学生は離れ離れに点々と座った。だから他の学生が、ドアや廊下の窓越しにのぞくと、広々とした教室なのに、座っているのはまだ少ない。たつぷり空席あり、とうつるわけだ。

「しめたつ」とばかりに学生が入ってくる。日語科の学生が、

「有考試」(試験中)

と言うと、最初、げんそうな顔をした学生も、納得して立ち去る。しかし、そういう学生があとを絶たない。そこで日語科の学生が黒板に白墨で「有考試」と書いた。

それでもドアを開けるのがある。そのつど集力がそがれる。とうとう、ドアの外に「有考試」と貼り紙をした。これで入ってくるのがいなくなり、やっと四年生は、試験に集中できるようになった。

一〇時、試験がすむ。四年生が答案を出そうと立ちあがりかけたたん、廊下で待っていた自習めあての学生がどつとなだれこんできた。

自習の席を確保するのがいかにたいへんかが実感できた一日だった。

このように北京大学の教室は、昼の休憩時間を除き、朝から夜遅くまで、授業に、そして自習用にと、フル回転で活用されている。

(元北京大学文専家)